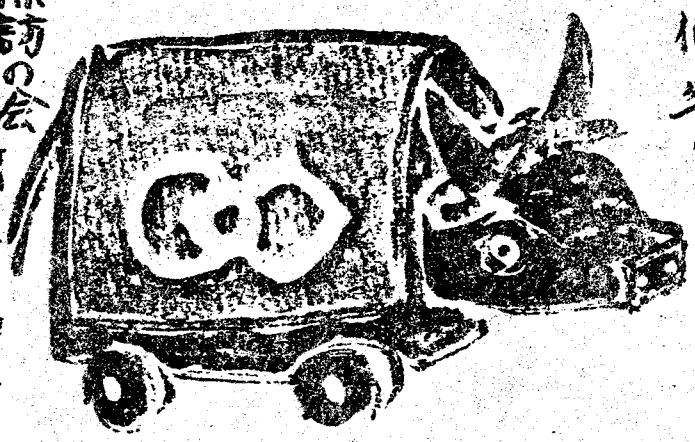
びんよう 13.14 びん8 14

備陽史探訪

NO.23
発行 備陽史探訪の会

賀正

因伯牛



備陽史探訪の会
副会長 神谷和孝
会長 中野
役員一同

新年を迎え今年の「備探会」を思う

会長 神谷和孝

会員の皆様、明けましておめでとうございます。御座居ます。新年を迎えて如何でしょうか。過ぎし新年を迎え、本会としても、今年度の活動の具体的な内容を皆様に示さなければいけない時期を迎えました。

昨年一年間の活動の内容をふりかえってみた時、これだけの活動がよくこなせたなと言う思いが最初に湧いてきます。と同時に、これもその例会や談話会を担当された方を中心に、皆様方会員の一人一人の協力があったからこそと言う感謝の気持が

〈特集〉正月に想う

石井、加藤、栗田

新年あけまして皆様方の当会に対し、今年も暖かい御理解と御協力をお願いいたします。

湧き出ずる創立以来の積み上げてきた内容に対し、中心になって昨年度の福山市内容に対し高い評価をいただく方々の会合に参加し、然し一方では会の本質を問われる事を話し合いたいと思います。

昨年度の内容は、十一月で終了致しました。

今年は、現在の状況から、果して五十六年度の内容を考えるべきか、反省を含めて、所期の目的に沿って活動を展開致したいと思います。

今年は、一昨年度の活動を反省し、新たに組み立てた活動内容を考慮中であります。

現在の会員は、福山市内の会員と、備陽史探訪会の目的地が福山市内であるため、会員の反省を生かし、御協力を願いたく、皆様方の心からのご援助と御協力をお願いいたします。

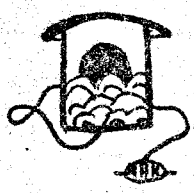
今年の活動を展開致しますノッシノッシと参りましょう。

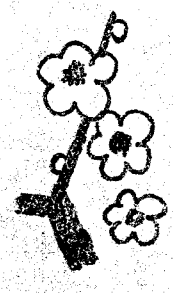
「新年を迎えて」

副会長　田口義之

会員の皆様、明けましておめでとうございます。さて、年が改まれば人の考えも変わるもの、そして本会も新たな目標を立てねばなりません。しかし、その前に過ぎし年の活動を振り返ることも必要です。そこから何かが始まるのです。一九八四年、もう"過去"となったでしょうか。日々、私達は何をしたでしょうか。毎月の例会、談話会etc、各々会員の皆様の御協力で何とか終えることができました。それは御承知の通りです。けれども私達致しては、決して満足のいくものではなかったことを告白しなければなりません。理由、原因共に数れ切れはありますが、ここでは申し上げません。しかし、何よりも"前進"することのみが唯一解決の方法なのですから……。

そこで私は皆様にただ一つのことを申し上げ、年頭のご挨拶と致したいと思います。それは"参加"ということです。"例会、講演会、各部会の行事"、御自身の興味次第でどの行事でもよろしいですから"気軽"に足をお運びください。私達の会は官製ではありません、全く私的な任意の団体です。そして、その主役は皆様一人一人なのです。私は皆様の一人一人が会の活力源であり、一人でも多くの人々に会の行事に参加していただくことこそが会の発展につながるものと確信致しております。本年もよろしくお願い申し上げます。





59年度活動

作成　吉田和隆

（二月）
22日　例会。高橋安子氏の講師により蛇円山へ登る。参加14人。
29日　談話会。新祖隆太郎氏による「県北の中世山城跡の研究の現状」。聴衆22人。於市民会館。

（三月）
11日　総会乃び談話会。田口義之氏による「備後中世武士団」の講演。聴衆22人。続いて総会で前年度活動報告、本年度活動方針承認される。於市民会館。
26日　例会。七森義人氏の講師で、新市を訪ねる。参加20名。

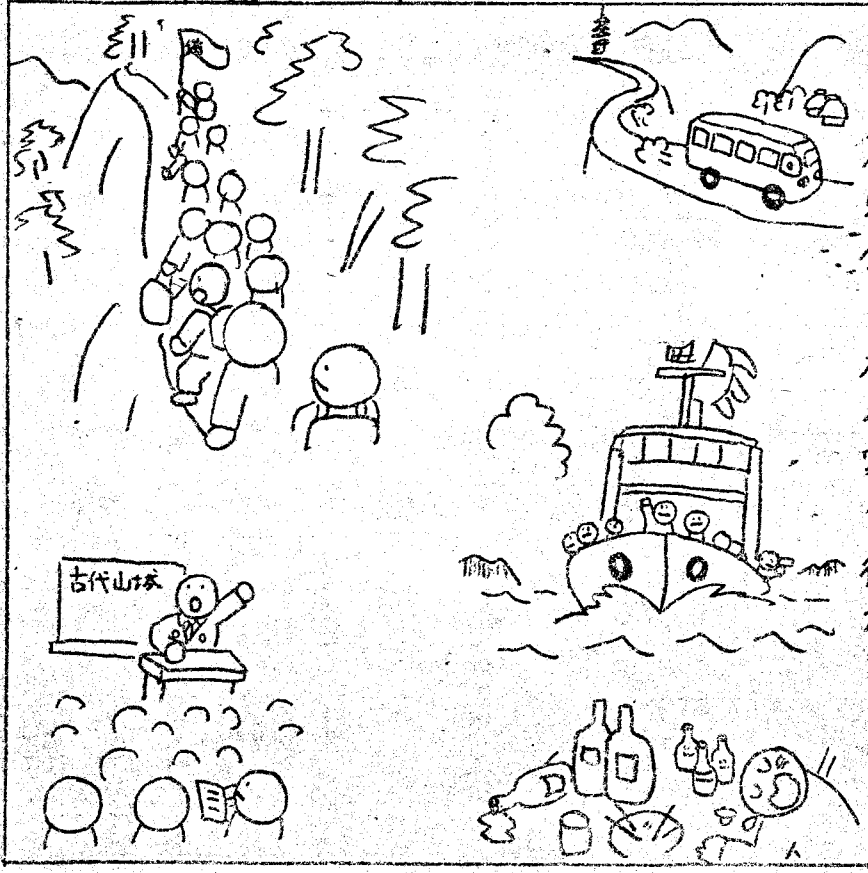
（四月）
11日　談話会。七森義人氏による「古代山城」。聴衆21名。於市民会館。
25日　例会。田口義之氏の講師で甲山に行く。参加56名。
八日　談話会。佐藤昭嗣氏により「神辺町の迫山古墳の発掘調査」。聴衆28名。於市民会館。
22日　例会。立石定夫氏の講師で、三和町をバスで巡る。58名が参加。

（五月）
五日　第二回親と子の古墳巡り。佐藤一夫氏、山口哲晶氏の講師で、赤坂町、津之郷町の古墳を見る。参加202人。
13日　談話会。田口義之氏の講演。「備後有地氏について」。聴衆26名。於市民会館。

（六月）
10日　談話会。青野春水氏により「近世備後の村落」の講演。聴衆33名。於市民会館。
24日　例会。武島種一氏の講師により、バスで神石を巡る。参加54名。

（七月）
八日　談話会。安井利雄氏により「大和国家の関東分国について」の講演。聴衆32名。於市民会館。
22日　例会。神谷会長の講師で、備前を探訪する。参加31名。

（9月）
16日、談話会。東田英夫氏による「吉田松陰」の講演。聴衆26名。於陽殿。
22、23日 旅行。立石定夫氏の講師により、萩に行く。参加23名。
（10月）
14日 例会。森礼子氏の講師で、靴を訪ねる。参加54名。
7日 映画会。「新平家物語」を上映。於市民会館。
（八月）
26日 談話会。田口義之氏による講演。「志川滝山合戦について」。聴衆31名。於陽殿。
（11月）
3日 第二回船めぐり。森本繁氏の講師で、真鍋島とその周辺をめぐる。参加143名。
20日 談話会。平井隆夫氏の講演「藤弁蔵について」。聴衆29名。於市民会館。
（12月）
2日 例会。神辺郷土史会の企画した会に参加、天明一揆の跡を探ねる。
14日 談話会。種本実、吉田和隆、七森義人三氏により、「赤穂浪士を探る」の題で、談話会。聴衆十名。於青年の家。
忘年会。松乃家で行なう。



特集

正月に想う

その一「仙台の正月」点描

加茂町
石井良枝

輪飾りの橙朝日よくあたり　松涛

正月を迎える準備は、十二月二十五日頃からはじめます。門松用の三階松（雄松、雌松）を一対、輪年縄（ふ松、ゆずり葉、昆布、短冊をはさみ込む）、和紙に印刷されている大年神様、大黒様、恵比須様、玉紙（蝦に星の玉を抱き合わせた絵）などを用意して、神棚を整えます。今でも郡部では、門口の両側に栗の木（やりくりがうまくいく）の支柱を立てて、門松をしばりつけ、輪年縄を掛けるそうです。二十八日は餅をつき、三十日のお歳取りの夜を迎えます。家族そろって祝膳を囲み、「結構なお歳取りです。」と言い合います。

焼きハゼの目慢雑煮や櫓町　とほる

仙台雑煮は、仙台湾でとれたハゼでだしをとり、土地の産物を実だくさんに盛るのが特徴です。実は、大根、人参、ゴボウ、シイタケ、カラドリ（干しズイキ）凍豆腐（岩出山産）糸コンニャクを線切りにして湯をくぐらせ、一回分を一握り大に丸めたものを、寒中の軒下にぶらさげ（今は冷凍庫に入れ）甘味を出します。この実を焼いた角餅が隠れるほどに盛り付け、飾りに鳴門、青味にはゼリを、そしてしょう油仕立のすまし汁を張り、最後にイクラ（サケの子）を散らします。三日まで甘いあんこ餅も同時に食べます。

家々の雑煮の味は、親から子（姑から嫁）へと受けつがれ、少しずつ形を変えていくものに思われ

ます。やはり「いただき慣れた味」こそが、それぞれに最高のものとなるのも不思議です。

御下(おさが)りや芭蕉ヶ辻の夜の景　不来

昔、城下町のここ四ッ辻には、大店(だな)が棟を並べ、龍の鬢を眺める一隅の御堂で、俳人芭蕉も旅の疲れをいやしたそうです。今では、オフィス街に姿を替え、たゞ石碑があるだけです。ここから南へ少し行くと東一番丁の繁華街に出ます。商店街恒例の行事「初売」は、三日、四日に行なわれます。その歴史は古いものと聞いています。客は、前日からめざす店の店頭に長い行列をつくります。各店が買物の額に応じて、先着順に手渡す多額な景品を得んがためなのです。御茶、呉服、電器、陶器、家具などの店舗に人気が集まります。

※「御下」…元日、または三が日に降る雨や雪

放り込めば神の火となるどんと祭　孫柳

十四日の夜は、思いくの神社の「どんと祭」に出かけます。中でも大崎八幡神社には、「裸参り」が繰り出し、そのにぎわいは格別です。人々は旧年中のお札、お守、神棚飾り、門松、破魔矢、書き初めなどを持って参ります。天をこがすほどに舞い上る炎の中に、喚声とともに投げ込んだあと、輪になって体をあたためます。すると「ひと冬風邪ひかない」と言います。

土地々々に人々が生きた証としての風習をいとおしむ心が湧くのも、私の身の上を過ぎた歳月のなせるわざなのでしょうか。　(60・1・8)

その二

福山の「とんど」について

加藤　愚一

福山の「とんど」は、もともと近郊の正月行事として広く行なわれていた「とんど」へ「さぎちょう」の異名」が、元和三年（一六一三）水野勝成の福山築城に伴なって整備されたのに始まるとされている。以来明治四年（一八七一）の廢藩置県までの藩政時代二百五十年間、正月ごとに、福山三十町鞆古町の「とんど」初が、三十六本がきらびやかに繰り出され、囃音頭（はやしおんど）とともに町内を巡行して、最後に、それが華やかにはやし憐れれたのを想像すると、たしかに城下町福山の正月の偉観であったにちがいない。

その間、元禄十一年（一六九八）水野家退散、元禄十三年（一七〇〇）松平家入城、宝永七年（一七一〇）阿部家入城等、為政者の変動にもかかわらず、連綿と引き継がれてきたのは、これが、もともと民衆を基盤とするものであったからであろう。

福山の「とんど」の代表は「吉津の「とんど」であった。他町も、はじめこれを公認してきたのは、水野勝成公の観覧に供したとき、吉津の「とんど」の「鶴亀」を筆頭にして、上魚屋町の「鯛」、下魚屋町の「伊勢海老」、堀端町の「諫鼓鶴」の飾が、とくに優遇であるとほめられたのによるとされている。その為、この四町の「とんど」の飾だけは以後変えることがなかったというのは、民衆のものであるとんどが、一方では為政者によって抑圧づけられていた事情を思わせるものがある。

福山の「とんど」は、明治維新以後も小さく形を変えて続けられてきたが、明和三年（一七二八）十一月十日、現在の天皇の即位式

のお祝いに繰り出したのを最後にしてその後、全町が揃って繰り出すことは無くなったようである。そして今日、戦災によって焦土となった後、工業都市として再建された福山では、市民会館の緞帳に、その面影を残しており、福山駅頭に観光用に建てられたこともあり、ばら祭りなどに子供たちによってあさな山車の形で繰り出されたりしてはいるが、いつしか正月行事のすがたは消え、全福山のてとんどの姿は見えなくなっている。

われわれ年輩の者は、寒念のあとなど、次のような囃音頭をうたってあさめる習慣があった。ある老婦人は、幼い時にてとんどの行列に出て、はやしたものだと言って、声に出してうたってくださった。

とんーどー、とんどーと、吉津のとんど。ヨイヨイ。

上は一鶴かーめー、すーよーいと五葉の松。ソラヨーイ、ヨーイ、ヨイヤナー。ハラリヤー、コラリヤー、ハーヤー、ヤトエー。

見たーかー、見て来たーかー、福山の城を。前がーお掘りで、すーよいと、がーすーむー。

なお、てさぎちょうの下略をてとんどを言うようになったのは近世で、その理由は正確でないが、恐らくは、その火の燃えるのをはやしたる言葉から来たのであろう。これは福山地方に限られたものではなく、正月十四日十五日の小正月に門松、竹、しめなわなどの飾りものをあわせて物を焼く習慣は、広中から始まって一般にひろがっていたのである。

その三

思想としての「正月」　東田東口

今では果してどうなのであろうか。例えば正月に初詣に行き「今年は豊年でありますように」と祈る人はどの位いるのだろうか。私の想像にすぎないがそれは「合格祈願」「交通安全」あるいは何も想い浮ばないので「とにかくしあわせになりますヨーニ」といった「しあわせ一般祈願」などに比べると問題にならない位の少なさなのではあるまいか。しかし、にも関らず日本の年中行事の多くがそうであるように正月もまた深く農耕祭祀とつるんでいるのであった。

ものの本によれば正月の原形は田の神を各家庭に迎えまた送り出す期間のことで、それがために人々は全る家事労働を休みひたすら精進したものようです。何のために田の神を迎えるかというと人間の魂のエネルギーを更新するためでこれを「魂振り」といいます。ちょうど稲の種子が冬の間外見上は「静」の状態でありながらその内部において春に向けてのエネルギーを蓄えている如く人間もまた新しい年に開花すべく魂の充電期間を必要とすると意識されたのでしょう。地方によってこの期間は異っていますが大体十二月の初旬に「松迎え」といって山から松を切ってきます。この松は「よりしろ」といい神の降臨するための入口のようなものですが現在では門松として残っています。正月すぎて田の神がまた帰ってゆく時にはこの松は焼やされたりします。これが「とんど」です。つまり正月のもともとの姿はこの三月から二月にわたる「忌みごもり」の期間にあたるのですがそれが何故三ヶ日に凝縮されるようになったのかは良く解りません。しかし現実的に考えてみればニケ月も仕事を休んでいればたちまち食えなくなってくるのは

昔も今も変りませんから　まあ当り前のことと言えます。

現在残っている何げない正月の慣習の中にも古代の信仰のあり方を見ることができます。例えば正月にはモチを食いますがこれは神との「共飲共食」のなごりです。特に鏡開きなどは一旦神にそなえたものを食べるのですからもっとハッキリしています。この様に神との共同飲食は神の持つエネルギーを人間に移入すると信じられたのですが、これが例えば「一味神水」などという百姓一揆の作法として民衆の中に伝ってきたことは大変興味深いことです。また「お年玉」などは本来神からいただく「お年魂」のことでありすぐれて精神的なものであったのですが現在では非常に嘆かわしい事態になっております。

日本の年中行事には元旦も含めて五節句や八朔、冬至、彼岸、盆などさまざまな「魂振り」のための節日が組み込まれておりますが、民俗学ではこれらを「ハレ(非日常)」と呼び日常を意味する「ケ」と区別しております。「ハレ」とは「ハレの舞台」であり「ハレがましい」日でありましたから人々は一切の労働から解放されそれぞれの「魂振り」を行ったのです。そこで結論として現在「働きすぎ」と批難されている我々日本人にとって非日常行為とは何か、「正しい正月」とは何かということですがこれはもうひたすら飲みしいし心安らかにゴロ寝することではないでしょうか。殊更私の様に普段から怠惰と言われている人間の場合は「非日常」的に過ごそうとすると返って一所懸命働かなくてはなりません。これをして「なまけものの節句働き」といいます。

私事で悪いんですが一　年賀状をくださった方々大変ありがとうございました。お返事もさしあげなくてすみません。宜しければ今年も仲良くして下さいね。

投稿

一年を振り返って

森紀子

私が当会に入会して未だ一年余りにしかなりませんが、例会実行委員の内に組み入れて下さったことで会の情勢を知る事が出来、いろいろ大変よく分かりました。

会の究極の目的は「歴史を研究する団体」である筈なのに会員のもの考え方も千差万別で随分と勉強になりました。

私自身は歴史について浅学で又古墳部会や歴民研に参加して会に対しては大口を叩ける立場ではありませんでしたが、楽しければいいじゃないとミーハーなフィーリングだけで例会に参加していました。

私は自分の力量の乏しさを充分認識していますので例会や談話会で深い知識が即座に自分のものに出来るとは思っていません。

歴史に限らず研究というものは自分自身が探求してゆかなければ身につくものではなく又時間も掛かります。

歴史は奥が深く広範囲に渡るものだからちょっと勉強したり顔は出来ないものだった位です。

私は機会あるごとに市や他の機関が主催する歴史講演会に出席しますが、一方的に聞かされるだけでは時として消化しきれない苛立たしさや焦躁感、或は物足りなさを痛感します。

しかし自分が受動的な姿勢でいる限りそれは附ソて廻るものでしょうね。

当会の中でより高レベルの研究を心差す探求心旺盛な会員にとっては現在の会の有り方は物足りなく面があるのは否めない事実です。

昨年割一年間行事に追われ多忙だった割には実りの少なかった面もありました。

これらの問題は今後も会員が増え一つの公共的な組織にな

れば増々ジレンマを感じることになるでしょう。これは他の研究団体が持つ共通の悩みでもあるでしょうね。私は会の運営と個人の会に望む希求心とはなかなか一致しないものと素晴しい事です。会員個々の歴史に対する思います。認識や姿勢に当然相違もあるし、能力にも差があります。其れ故ある程度割り切って対処すべきでしょう。しかし幸いな事にこの会はその気になれば能動的に活躍する機会はいくらでもあります。たとえば山城志に研究発表するとか例会を担当するのも一方法です。唯残念な事に私自身独学していても歴史は特殊な専門用語や人名、地名など読みにくいものが多々あり、ルビを振っていない場合困窮する事が度々です。それらを会員相互が教えあったり気軽に質問出来る雰囲気作りも必要だと思います。その意味では底の浅い表面的なつながりだけではなく仲良しクラブは大いに結構だと思うのです。会員相互が利害や年令差、性差に関係なく一つの目的を持つことは今年はそれらを踏まえて前向きに検討していくべきでしょう。私は今後他の歴史団体と交流を深め又専門的な知識を持つ人達と身近に意見交換が出来ればいいなと考えます。会の運営も営利団体でない以上、世話役も一種のボランティアですから一部の人達に責任を押し付けるのではなく、個々の会員が協力して盛り立てて行くべきものと思います。一年を振り返ってみて備陽の会が分別ある大人の知的集団であったことでつくづく当会に入会して良かったと思えるのです。

投稿を観迎します。

〒720 福山市川口町398の13 種本実・宛

『島巡りに参加して』

私は先日の島巡りに参加しました。孫が府中市なので海を見ることがないので二人つれて行き、お世話になりありがとうございました。昔、夏休みに島巡りをしたので名前は知っていましたが厳史的なことは知りませんでした。森本先生の説明をききそんなことがあったのかな！といちいちうなずき勉強になりました。家に帰りテレビをみると朝、孫の手を引いて船に乗りに行っている場面が映りました。「アッ、千ちゃんだ、おばーちゃんだ」と、ほんとうに有意義な島巡りでした。ありがとうございました。

―編集部より―

千田町の会員の方から昨年の十月に編集部にいただいたハガキを紹介させていただきました。

☆部会だより　【城郭研究部会】

府中市久佐町「楢崎二子山城」を調査

なかなか目標が決まらず右往左往していた我々であるが、やっと目標が定まり「山に入る」ことができた。

今シーズンの調査目標は府中市久佐町に残る中世山城跡「楢崎二子山城」で戦国時代の武将「楢崎氏」の居城と伝わるものである。

第7日目の調査は去12月9日(日)に三次地方史研究会の新祖隆太郎氏のご指導のもとに部会員五人が参加して行ない、素晴しい晴天の中で城跡の約半分の測量を済ませることができた。

測量は平板とレベルを使用し、正式な実測調査とは言えないが住宅の巻尺によるものとくらべて一段とレベルの高い図面ができる予定である。

今後は一月20日に城跡の残りの部分の測量を終え、その後は月1回のペースで「関連地名」「周辺の中世遺跡」等の実地調査を行ない、室内での文献による調査と合せて、年内には「楢崎二子山城跡」の総合調査結果を報告したいと思っている。

なお、部会への参加は自由で希望者は左記まで連絡していただきたい。

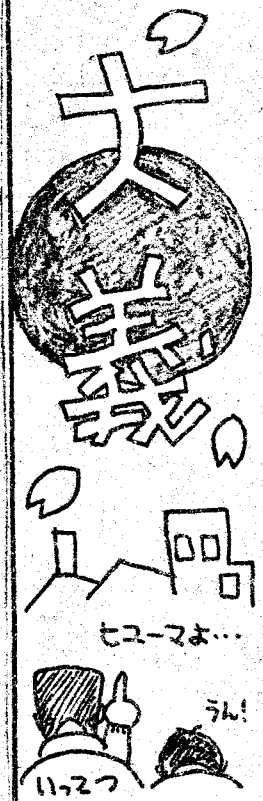
〒720　福山市多治米町九一六
田口義之方　TEL 〇八四九　五三一六一五七

※老若男女、初心者の方もふるって御参加下さい。

部会の「大義」

歴民研

ミーっとウチの部会としては　本当は書く程のことはないんですよね。昨年の反省としては参加者おのおのの興味のあり方や意欲というものを部会の行事として上手く生かしていけなかったなあということで　現在の低迷は全てとこに由来している訳だけれど　まずこのことに執着していかないとどの様な代案を出しても結局目先きを変える位のことに終ってしまう気がします。当面せっかく買った『日本の歴史』の講読会は続けますが、それと平行して部会員へらしき人しを対象として「部会通信」的なものを出していきたいと思います。今考えているイメージとしては「会報」の如き心理的制約もなく、「山城志」のように内的しべルも気にすることなく、何よりも部会員各自の歴史への関心のありようが開示されるような、とこから活動へのヒントが出てくるような、極めて「動」的なものをと思っています。部会活動は世間に向けてのアリバイ作りではありませんからマイペースでやりましょう。ときにはスキップなどふみながら。こころは少年!



古墳研究部会情報(三・三月)

一、府中千原古墳の発掘調査は今月(二月)も続行しておりますので、手伝い及び協力希望の方、詳細は篠原氏まで御連絡下さい。(TEL　二六一〇一〇三)

二、当研究部会では三月より、神辺町の古墳の測量調査を実施する予定であります。参加希望及び詳細は山口まで御連絡下さい。(TEL　四一一二〇四九)

三、当研究部会では後日、古墳研究部会に対する意見、希望等のアンケートを当研究部会員にのみ送付する予定にしてありますので、宜しく御協力下さい。

∴編集部より∴

此様に各部会は精力的に活動しております。各会員もふるって御参加下さい。

新聞からの厂史関係記事

今回は昨年10月～12月分です。10月は朝日と読売、11月・12月は朝日のみです。他紙も掲載の予定でしたが閲覧の時間がなく(怠慢)で申し分けありません！種本！

10月

一　中国人学者も支持「縄文期に稲作の起源　我国では賛否両論　朝

・「出雲国風土記」の神社数とほぼ一致　荒神谷遺跡の大量銅剣 358本　朝

・再評価迫られる日本海ルート　環日本海金沢シンポジウム　朝鮮海峡、東シナ海以外にも重要な古代大陸との海上の道があった　朝

三　・襖の下張りに厂史を読む　各地で多様な古文書発見　生活の足跡知る宝庫　朝

・古代を見る「東明神古墳ふたたび」11/9まで連載　読

・模様入りの石棺の蓋発見　兵庫・和田山町　古墳期　畿内王権が進出　読

四　東明神古墳の石槨復元　読

四　日本刀作り　秘伝特訓　島根県・横田町　読

五　厳島神社の鐘あす旅立ち　二十八年県指定文化財　秀吉が九州平定の際福岡県宗像市から持ち帰り厳島神社へ奉納・宗像市では昭和の初めから返還運動・今回一年間返し出し。　読

六　縄文前期(5500～6000年前)の弓また出土　福井・鳥浜貝塚　同所で三つ目　長131cm　径2cm　読

八　前方後円墳　これが証拠写真　韓国・松鶴洞一号墳　「前方後円墳は朝鮮半島起源説」の韓国教授　読

十　石見地方に珍しい方墳　貴人？が葬れた　益田の鵜ノ鼻50号墳発掘　海沿いに50基以上の群集墳　読

十二　江崎古墳で石棺発見　古代吉備解明有力手がかりも　備中国分寺の北西100m　読

十三　最古？の装飾壁画発見　山梨・国史跡丸山塚古墳の縦穴式石室　数十ヵ所に朱の模様　朝

十二 藤原宮発掘の50年
特統・文武・光明天皇の皇居　(10/19も)　読

十三 県指定文化財 平城で初の史跡に
「高杉城跡」三原市 天文二十二年(1553)七月の江田合戦毛利方により落城した祝(ほふり)氏の城跡　読

十四 弥生時代のマグロ針 松江で出土 西川津遺跡
「好太王碑」新たに解読 中国の第一人者　朝読
平安密教の曼荼羅 高野山で発見　読

二十三 三原で備中神楽奉納 応永十五年(1408) 三原桜山城主山名家を離れ後月郡川手村(芳井町)で村を興した人々の子孫　朝読

二十四 民具など七百点収蔵 双三郡三和町資料館　読

二十五 わが町の厂史・行事つづる「古里の証」出版
尾道市議 岡田さん　読

二十六 住職が民話集
府中の桑田さん 三冊目　読

11月 (すべて朝日です)

四 東明神古墳 たて・よこ比率天皇陵と一致
草壁皇子説を補強

六 縄文前期層から麻の種 福井の鳥浜貝塚
畑作裏付ける有力物証

九 埴輪の破片に文字 愛知の遺跡 古墳後期の作?
東日本で、しかも埴輪に刻まれていたのは初めて

十四 金製の仏像二体出土 奈良大峯山寺 山岳信仰と修験道の拠点 平安期三cmのミニ (11/29にも)
浄福寺遺跡①と松賀山遺跡② 発掘報告 東広島市
①弥生中期～古墳時代にかけてのミニ土器 高さ平均三cm
②頂上にある自然巨石「サイノカミ」と呼ばれ悪霊をはらい、村境を守る神 古墳時代から信仰

十八 中国最古の絵画と符号発見 五千～七千年前文字起源

二十 宮城県・中峰遺跡 十四万～三十七万年前と判明
日本最古を確認 北京原人クラスの存在も

二十二 これが原人20万年前 画期的な全身骨出土
原人像の書き換え迫る ←中国←
・紋様入りひょうたん出土 松江・西川津遺跡

二十八 故人の遺稿継いで町誌 ←福山熊野文化保存会←

二十九 壬申の乱の遺物かヤジリ100本も
←奈良・明日香村 石神遺跡←

三十 古代兵士の勤務表 ←宮城県の多賀城跡←
平安初期500人くらい詰めていた…木簡文章より

12月 (すべて朝日です)

三 恩しゅう超え小早川史跡訪問
「天正の陣」ゆかりの新居浜市民
秀吉が三原城を総本陣として四国を攻めた
(天正13年1585・野々市ヶ原の戦い)

五 期待高まる水中考古学 ←学会誕生←
多い手つかずの遺跡・源平の沈船の調査を

十一 古墳時代の掘立て建物跡群発掘 ←神辺・大宮遺跡
規模は県内最大級 大型の棟

十九 「倭国大乱」関連に慎重「高地性集落」の命名者
"高地性集落"といっても畑作用、防御用等用途が多様
でしかも、出現する時期も縄文～古墳と長期であるこ
とから"倭国の大乱"との関連はうすいのでは?

二十三 歯車型の純銀の指輪 ←径2cm 奈良・巨勢山(こせやま)古
墳群(五～七世紀) 耳飾り? 金製の玉 ←径1cmも
古墳期・朝鮮半島製か

二十五 金張りの鐺(とうたん)金単鳳環頭(ほうかんとう)(大刀の先端の飾り)出土
奈良・竜王山古墳群(六～七世紀)千基以上最大級の群集墳

二十六 紋様入りの土笛が出土 ←松江・西川津遺跡←

三十 掘った出た、輝いた考古学 ←ベスト5・発掘発見50
瓦を石室に敷く ←飛鳥の寺院より古い奈良の古墳
瓦が飛鳥の寺院で使われ始めたのが七世紀前後

←THE END←

60年の活動予定

会報編集部

備探の会は、できてから今年で五年目になる。初めは七、八人だったのが、今は百四十人の大きな会になった。会の運営方法もそれに伴い手直ししたものの、かならずしもうまく機能せず、会員から様々の不満の声を聞く事となった。

そこで昨年暮れに、会の決定機関である評議会が、度々開かれ見直しが図られた。その中で幾つかの大きな路線変更も行なわれた。それ等は二月に予定の総会での承認が必要である。しかし評議会案として、その一部をお知らせします。

（例会）

一、例会は毎月行なっていたのを一月おきに修整する。

一、60年は福山市を中心として、例会を行なう。

一、例会の講師は、これまで一人であたっていたのを、複数に改める。

（談話会）

一、談話会は、毎月の開催を隔月とする。

一、内容はなるべく例会と関連した物とする。

一、企画運営は評議会があたり、談話会実行委員会は解消する。

（5周年記念行事）

会の発足五周年を記念して、行事を行なう。内容は未定。

以上のようにこれまで毎月あった例会、談話会が、共に隔月になる。これにより準備期間が長くとれるので、これ迄以上に充実した例会、談話会として行きたい。

＝例会実行委員会より＝ （次ページ）

さて、例会実行委員会では、暮れから三度程会議を開き、年間計画を次のように決めましたので、お知らせします。

2月24日(日)　福山市東部の史蹟探訪
3月31日(日)　〃　北部　〃
5月5日(日)　親と子の古墳巡り(第三回)
7月?日　福山市西部の史蹟探訪
9月15、16日(日、月)　奈良に一泊の史跡見学。
10月?日　福山市南部の史蹟探訪
11月?日　豊松村の史蹟探訪

2月例会は24日(日)と日程が決まり、現在四人の担当者が準備中です。近々案内を送りますので、多数の御参加をお願いします。

1985
元旦

‖行事予定‖

◎第22回古墳講座
二月13日(水)午後7〜8時半
県立福山青年の家和室
テーマ「最後の前方後円墳 ハ92」
豊田ダダ。問い合せ先 41-2049(山口)

‖お知らせ‖

◎府中市「千原古墳の発掘調査」
主催 府中市教育委員会
二月の土、日曜日。
参加希望者は、76-0103 篠原芳秀氏まで。

‖編集後記‖

おめでとうございます。世紀末に生きる我々。その行く手にあるのは世界終末の奈落か、はた又明るい未来社会か。思えばあまりおめでたくないのである。ノストラダムスによれば、あと十四年で世界は終わるそうである。

となると会報は一〇四号をもって終わる事になる。その時総タイプ印刷、上質紙の豪華雑誌に変わっているか、「え？　そんな雑誌あったの？」となるか。

を入れて下さ